

# 触れる

## 一路 眞実

「さっきはごめん！ これ！」

男は小さな紙切れを少女に渡した。

「ちよっと……」と紙を返そうとしたが、男は逃げるように電車を降りてしまった。

小さく折り畳まれた紙を広げると、少女は硬い表情のまましばらく眺めていた。そして、その行為を見ていた周囲の大人に聞こえるように、「キモイ……」と呟き、紙を窓の溝に挟んだ。「少女」という生き物は、しばしばそうして他人が入って来ることを拒絶する。時折強烈に、嫌悪という感情を剥き出しにする。

「何が書いてたの？」

彼女は見知らぬ女性に声をかけられて目を見開いたが、一言、「電話番号とか」とうつぶいた。

「ウケるね」

と言うと、その言葉遣いに誘われるように彼女はふっと口を弛めて、ようやく笑った。

「どうして、マアたんは生きてるの？」

窓から外を眺めていた幼児が、母親に聞いた。

「マアたんは、犬だからよ」と、母親が諭す。

電車が揺れる。大きな音が親子の会話をかき消していく。

小さな頃は、未知のものが怖い。だからこそ世界に対して、怖がりながらも触れようとする。幽霊や妖怪が怖い。病室でただ寝ているだけの人間も怖い。しかし、怖いからこそ、質問する。恐怖が、興味を生む。しかし、大人になったら気付くのだ。うまく生きるためには鈍感であること。何も考えず、恐れることもなく、鈍感に生きられれば幸せなのだ。目の前の出来事も日々の人間関係も、触れずに生きていけば、心の平穏が保たれる。何かあっても知らないふりができる。見なかった、と言える。

一方で、怖さを忘れることは、世界に対して興味を失ってしまうことと同じだ。自分と世界の世界に深い壁を造ることなのだ。そうして、壁の内側でただひたすら世界が過ぎゆくことを願っている。その一方で、膝を抱え、ただじっと日常の平凡さを憂えている。

電車が駅に停まり、先ほどの少女が降りた。誰も乗って来ず、妙な静けさが車内に広がる。もう一度、幼児の声が響いた。

「どうして、生きてるの？」

— 終 —

